

60分でわかる旧約聖書(10) 「サムエル記第二」

1. はじめに

(1) 書名

- ①本来は「サムエル記」という一書である。
- ②七十人訳が便宜的に第一と第二に分けた。
- ③それ以降、その習慣が定着した(ヘブル語聖書も同様)。
- ④サムエルが最初に登場し、中心人物として活躍するので、この名が付いた。

(2) 内容

- ①サムエル記全体は、前1120年頃から約150年間の出来事を記している。
- ②サムエル記から列王記までの歴史書の流れ
 - *単独の王国(ユダ族のみ)
 - *統一王国(12部族すべて)
 - *統一王国(ソロモンが継承)
 - *単独の王国(ユダ族とベニヤミン族)

2. アウトライン

I. 権威ある座に上るダビデ(1~10章)

1. サウルとヨナタンの死(1:1~27)
2. ヘブロンでの即位(2:1~4:12)
3. 統一王国の王として統治(5:1~10:19)
 - (1) エルサレム遷都(5:1~25)
 - (2) 神の箱の移動(6:1~23)
 - (3) ダビデ契約の締結(7:1~29)
 - (4) 外敵に対する勝利(8:1~18)

II. 権威ある座から転落するダビデ(11~20章)

1. バテ・シェバとウリヤに対する罪(11:1~12:31)
2. 家族問題(13:1~14:33)
3. アブシャロムの謀反(15:1~20:26)

III. 補足説明(21~24章)

3. 結論(物語の背後に神学的意味がある)

- (1) ダビデ契約(7:1~29)

(2) ダビデの最後の言葉(23:1~7)

サムエル記第二を通して、ダビデの生涯の意味について考える。

I. 権威ある座に上るダビデ(1~10章)

1. サウルとヨナタンの死(1:1~27)

(1) 主によって開かれた扉

- ① 試練の中にありながら、ダビデはすべての状況を主に委ねていた。
- ② 彼はサウルの死を望んではいなかった。
- ③ そのダビデのために、突如扉が開かれた。
- ④ 時が良くても悪くても、主に信頼することを学ぼうではないか。

(2) ダビデの悲しみ

- ① アマレク人の若者が、褒賞目当てに、サウルとヨナタンの訃報をもたらした。
- ② ダビデは、深い悲しみと哀悼の意を表わした。演技ではない。
- ③ アマレク人の若者は、処刑された。

(3) 弓の歌

- ① ダビデは、サウルとヨナタンのために哀歌を作った。
- ② これをユダの子らに教えるように命じた。
- ③ 3連から成る哀歌で、各連の始まりが「ああ、勇士たちは倒れた」である。

2. ヘブロンでの即位(2:1~4:12)

(1) 主の指示を仰ぐ

- ① 次の行動に移るために、主にお伺いを立てる。
- ② 主はダビデに、ヘブロンを示された。

*ユダ部族の中心の町、父祖アブラハムの墓のある町

(2) 油注ぎ

- ① ヘブロン長老たちは、ダビデに油を注ぎ、王とした。
- ② 預言者サムエルによる油注ぎに続く第2の油注ぎであった。
- ③ ダビデは「ユダの家」だけのための王となった。
- ④ この時からヘブロンがダビデ王国の首都となった。
- ⑤ サムエルによって油注がれ、主の霊の注ぎを受けたのは、十数年も前のこと。
- ⑥ ヘブロンで油注ぎを受けた時、ダビデは30歳になっていた。
- ⑦ 主の器は、一朝一夕で完成するものではない。

(3) ダビデの忍耐

- ①彼が統一王国の王になるのに、さらに7年半かかった。
- ②ダビデを有能な王、またより成長した主の器に育てるための神の計画。
- ③ダビデは、メシアであるイエスの型である。
- ④イエスはメシアとしての油注ぎを受けていたが、民は信じなかった。
- ⑤ダビデは統一王国の王としての油注ぎを受けていたが、民は認めなかった。

3. 統一王国の王として統治(5:1~10:19)

(1) エルサレム遷都(5:1~25)

- ①サウルの息子イシュ・ボシェテの死
- ②イスラエルの10部族の長老たちがダビデに油を注ぎ、王として迎えた。
- ③ダビデが油注ぎを受けるのは、これが3度目。
- ④ダビデの在位期間は40年(ヘブロンで7年6ヶ月、エルサレムで33年)。
- ⑤30歳で王となり、70歳まで王として統治した。
- ⑥エルサレム遷都の理由
 - * 中間の町
 - * 防衛上の理由
 - * ギホンの泉
- ⑦神ご自身がエルサレムを神の都として選ばれた。

(2) 神の箱の移動(6:1~23)

- ①神の箱はキルヤテ・エアリムのアビナダブの家に安置されたままであった。
- ②神の箱をエルサレムに運び上ることは、国家的な事業であった。
- ③ダビデはイスラエルの精鋭3万人集め、この事業に当たろうとした。
- ④前王のサウルは、神の命令と神の箱を顧みようとしなかった。
- ⑤ダビデは、神の命令と神の箱に対する敬意を表明した。
- ⑥ダビデは、神の箱を新しい車に載せて運んだが、これが問題であった。
- ⑦ウザは、神の箱に手を伸ばしたため、その場で即死した。
- ⑧2度目は、モーセの律法が命じるとおりにレビ人たちが主の箱を担いだ。
- ⑨このときダビデは、主の前で力の限り踊った。
- ⑩さげすんだ妻のミカルは、生涯子を産むことがなかった。
- ⑪神の箱は、所定の天幕の真中に安置された。

(3) ダビデ契約の締結(7:1~29)

- ①ダビデは、神の箱のために神殿を建てたいと願う。
- ②預言者ナタンを通して主のことばが届けられる。

- ③戦士ダビデではなく、ダビデから出る世継ぎの子が神殿を建設する。
- ④それに続いて、ダビデ契約が締結される。
 - *無条件契約、永遠の契約である。
 - *アブラハム契約やシナイ契約に匹敵するほど重要な契約である。

(4) 外敵に対する勝利(8:1~10:19)

- ①ペリシテ
- ②モアブ
- ③北方の小国ツォバ
- ④ダマスコのアラム

II. 権威ある座から転落するダビデ(11~20章)

1. バテ・シェバとウリヤに対する罪(11:1~12:31)

(1) 誘惑の舞台設定

- ①「年が改まり」。雨季から乾季に入ると、戦争ができる状態になる。
- ②アモン人との戦いが再開された(10:14で一時中断していた戦い)。
- ③ダビデは、将軍ヨアブを指揮官とし、自分はエルサレムの王宮に留まった。
- ④それが、ダビデが誘惑に会うための舞台を用意した。

(2) 罪の内容

- ①バテ・シェバと姦淫の罪を犯した。
- ②ウリヤを殺害した。

(3) 罪の結果

- ①側近の信頼を失った。
 - *将軍ヨアブの暴走が始まった。
- ②民の信頼を失った。
- ③国家でも個人でも、正義を行えば祝され、それに反すれば呪われる。

(4) 預言者ナタンの糾弾と詩51篇

- ①自分が犯した罪は、何よりも主に対するものであった。
- ②自分には、弁解の余地がない。
- ③罪の結果、聖霊が取り去られ、自分は神の臨在から切り離された。
- ④しかし、神の恵みによって神に立ち返ることができると信じる。

- (5) バテ・シェバを妻に迎える。
 - ①最初の子は死ぬ。
 - ②次に生まれたのがソロモンである。

2. 家族問題(13:1~14:33)

- (1) 家族内での近親相姦と兄弟殺しの悲劇
 - ①アムノンが異母妹であるタマルを強姦する。
 - ②アブシャロムは、2年後に長兄アムノンを暗殺する。
- (2) ダビデはアブシャロムに対してあいまいな態度を取る。
 - ①息子のことである。
 - ②自分自身も問題を犯した。

3. アブシャロムの謀反(15:20:26)

- (1) 4年かけて準備し、ヘブロンで蜂起した。
 - ①ユダ族の人たちの心を掴む作戦
- (2) ダビデの都落ち
 - ①敵と味方が明らかになる。
- (3) アブシャロムの死
 - ①ヨアブは王の命令に背いて、アブシャロムを殺した。
- (4) ダビデの復権
 - ①ダビデは最後まで、ヨアブに対して強い態度を取ることができなかった。
 - ②ヨアブに弱みを握られているから。

III. 補足説明(21~24章)

結論：歴史的事件の内にある神学的意味

1. ダビデ契約(7:1~29)

- (1) 2サム7:4~17(ソロモンに焦点を合わせた契約内容)

2Sa 7:14 わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。もし彼が罪を犯すときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。

(2) 1歴17:7~14(メシアに焦点を合わせた契約内容)

1Ch 17:13 わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。わたしはわたしの恵みをあなたの先にいた者から取り去ったが、わたしの恵みをそのように、彼から取り去ることはない。

1Ch 17:14 わたしは、彼をわたしの家とわたしの王国の中に、とこしえまでも立たせる。彼の王座は、とこしえまでも堅く立つ。」

(3) ダビデ契約の本質(無条件契約)

- ①アブラム契約の「子孫」の条項に関係している。
- ②ユダ族の中のどの家系からメシアが誕生するかを明らかにした。
- ③ダビデの息子の1人が王座を確立し、神殿を建設する。
- ④その息子は、罪を犯したなら罰を受けるが王位から退けられることはない。
- ⑤メシアはダビデの家系から出る。
- ⑥その王国は、永久に確立される(メシア的王国)。

2. ダビデの最後の言葉(23:1~7)

2Sa 23:1 これはダビデの最後のことばである。／エッサイの子ダビデの告げたことば。／高くあげられた者、／ヤコブの神に油そそがれた者の告げたことば。／イスラエルの麗しい歌。

2Sa 23:2 「【主】の霊は、私を通して語り、／そのことばは、私の舌の上にある。

2Sa 23:3 イスラエルの神は仰せられた。／イスラエルの岩は私に語られた。／『義をもって人を治める者、／神を恐れて治める者は、

2Sa 23:4 太陽の上る朝の光、／雲一つない朝の光のようだ。／雨の後に、／地の若草を照らすようだ。』

2Sa 23:5 まことにわが家は、このように神とともにある。／とこしえの契約が私に立てられているからだ。／このすべては備えられ、また守られる。／まことに神は、私の救いと願いとを、／すべて、育て上げてくださる。

2Sa 23:6 よこしまな者は／いばらのように、みな投げ捨てられる。／手で取る値うちがないからだ。

2Sa 23:7 これに触れる者はだれでも、／鉄や槍の柄でこれを集め、／その場で、これらはことごとく／火で焼かれてしまう。」

(1) 遺言ではなく、ダビデの最後の詩、最後の預言という意味である。

- ①主の霊(聖霊)によって靈感を受けて語ったものである。

(2) この詩の内容

- ①名君とは、公義と敬虔をもって人々を治める王のことである。
 - *そのような王は、さん然と輝く朝日のようであり、雨に濡れた若草を照らす日の光のようである。
 - *それは、ダビデの子である主イエスの生涯を預言したことばでもある。
- ②彼は、自らの生涯を振り返り、自分が完璧でも義なる王でもなかったと感じている。
- ③しかし、とこしえの契約(ダビデ契約)のゆえに、不十分な自分でも主の守りの中にあることを信じ、主に感謝している。
- ④さらに、主は自分の救いを完成してくださるとの信仰を告白している。
- ⑤最後に彼は、「よこしまな支配者は人々に害と苦痛しか与えない存在であり、それに触れる者は傷を負わされるだけである。その者には苛酷なさばきと、滅亡とが待っている」と預言している。